

私を創造する

佐藤俊一

淑徳大学社会学部助教授

高度成長期からの私たちは、ほとんどの人が未来のことを考え、そこへ進んでいくことに熱中してきた。子どもたちの生活をみても、社会の評価の高い大学に入るという未来の目的のために、今の時間を使ってきた。大人たちは、将来の自分の生活設計のために今の時間を消費してきた。つまり、未来の目的のために今の時間を使い、今が大事にされていないのである。

他方で、未来の目標のために生き、頂点をきわめていくことは、そのプロセスから結果において新しいモノを創り出していること、時代や社会の主流にすることが、創造のプロセスにいるという錯覚を産み出してきたようである。欠けているのは、今を大切にしながら生きているのか、そのことにより、「自分自身が創造されているか」という点である。

時計の時間に追われて、「今」を追いかけるように生きることを止め、少し立ち止まって時間を体験してみよう。そうしてみると、何かをしなければならないという能動性としての私だけでなく、受動的に生きる受け身としての私が見えてくる。現代を生きる人間に忘れられているのは、この受動性としてのあり方である。何かに向かって人が生きられるのは、私たちの身体がこの受動性を用意してくれており、それを使って能動的に生きられるからである。ただし、健常者にとっては、それはあまりにもあたりまえのことなので気づかれないままになっている。

障害者の主体性が発揮しにくいというところを見ていくと、この受動性

に気づかされることが多い。たとえば、新しい課題に取り組むときに、健常者ならばあたりまえに始めていくことでも、障害者が躊躇することが見かけられる。それは、何かを始めるときの準備の時間である。体験の時間はゆっくりと進み、受動性を現している。しかし、この受動性から始めていくことによって、逆に自己の一貫した行動ができるようになる。

この「受動性」は、他者との関係において、人の話を聴いたり、受けとめることの基礎となっている。他者に働きかけることと、他者を受けとめることが、人と人の関係であり、この受動性から行動していくことが関係を生きることになる。また、そこではお互いが、体験する時間を共有しながら共に生きることができるのである。他者との関係における主体性の発揮と自分自身のなかでの自己の一貫性をもちながら、創造的に生きられることになる。そこに障害者が生きる姿の中に人間の基本的な主体性のあり方を考えるヒントがある。

時間を一直線に生きる私たちは、この受動性を忘れたところから始めるために、後になって「何でこんなことをしているのか」と嘆くことになる。

資源が乏しくなり、成長の限界が見えてきた社会において、「創造的に生きる」ために、今私たちは、一度立ち止まって、この忘れられた受動性から始めていくことによって「私を創造する」ことが必要なのではないだろうか。

